

# 「主の祈り」に見られる 日本語聖書翻訳の歴史

大学名誉教授  
近藤 泰弘  
KONDO Yasuhiro



## はじめに

日本語による聖書翻訳の歴史を考える時に「主の祈り」はたいへん重要な資料になります。「主の祈り」は、マタイによる福音書第六章、ルカによる福音書第十一章に収載されていますが、使徒ペトロやパウロが活躍していた頃からわずか数十年後には、すでに日々の祈りとして唱えられていた記録が残っており、キリスト教の各派において極めて古い伝統を持っています。ところで日本語聖書翻訳の歴史の中には、文語から口語へという大きな流れがあります。しかし問題はそれだけではありません。そこには、神に対してどのような語で敬意を表すか、つまり「神への敬語」という、きわめて日本語的な問題が含まれているのです。

ここで注目したいのは、キリシタン時代の翻訳が、単に外国語を日本語に置き換えたものではなかったという点です。そこでは、当時の日本語の文体、とくに物語文や宗教的な語りにふさわしい敬語表現が積極的に用いられました。「まします」「たまふ」「御名」「御代」といった表現は、神を日本語の中で高い存在として位置づける働きを持っています。これは、ラテン語やポルトガル語の原文にはまったく存在しないもので、日本語の文法と文体が持つ敬意表現の仕組みを使って、聖書の持つ世界観を日本語の中に根づかせようとした結果であったと見るができます。さらに「名」の尊敬語としては一般的に「み名」と「おん名」がありますが、日本語の伝統としては、「みな」の方は、「神仏の名前」に用いられるのが普通です。この書でも、ローマ字本の方を見ると「みな」と読んでいることがわかり、これと合致しています。これらの工夫はその後も継承されて、近代の翻訳でも使われることになったのです。

キリシタン時代の聖書翻訳の方法は、『日葡辞書』などの当時の文献の中で保存されています。また、幕末になって、長崎のカトリックの宣教師、プチジャンがそれを復元して広めたことなどもあり、カトリックの祈りの伝統として、近代にも伝えられることになったようです。

## キリシタン時代の聖書翻訳

日本語聖書翻訳の最初期に位置するものとしては、十六世紀のキリシタン時代の翻訳があります。イエズス会士マルコス・ジョルジェが一五六六（永禄九）年にポルトガル語で刊行した教理書の翻訳が、『どちらなきりしたん』（キリシタン教義）という書名で、日本でも何種類か刊行されています。本文中に、「ばあてるのすてるのおらしよ」（我らの父の祈り）として、次のような祈祷文が見られます（一六〇〇年長崎刊国字本の表記による。括弧内はローマ字本等により補った）。

てんにましますわれらが御おや、御名をたつとまれたまへ、御代きたりたまへ。てんにをひて、おぼしめすまゝなるごとく、ちにをひて、

## 明治以降への継承

明治期に入ると、米国人宣教師ジェームス・カーティス・ヘボン（明治学院の創始者、ヘボン式ローマ字を普及させた）を中心としたプロテスタント宣教師たちによる聖書翻訳が本格化し、一八八〇（明治十三）年には、いわゆる明治元訳の新約聖書が完成しました。明治元訳のマタイ伝の「主の祈り」では、

天に在ます我儕の父よ、願くは爾名を尊崇させ給へ。爾国を臨らせ給へ。爾旨の天に成ごとく地にも成せ給へ。我儕の日用の糧を今日も与たまへ。我儕に罪を犯す者を我ゆるす如く我儕の罪をも免たまへ。（後略）

このように、キリシタン時代の訳に近い文語体の表現が用いられました。ここには、やはり伝統的な「まします」「給へ」「み名」などの尊敬語表現が見られます。ただそのまま継承したわけではありません。例えば、ここにある「願くは（中略）給へ」という文型は、文学作品では、中世の説話や軍記にもつばら現れる典型的な漢文訓読調のもので、和文と漢文訓読との融合が明治元訳のひとつの大きな特徴です。また、謙譲語は用いられなくなっています。ヘボンは、聖書翻訳に関する論文の中で、敬語は極力使わないが、神やイエスに関してだけは「たまふ」「御」といった限定的尊敬語を用いるという方

もあらせたまへ。われらが日々の御やしなひを今日われらにあたへたまへ。われら人にゆるし申ごとく、われらがとがをゆるしたまへ。われらをてんたさんに、はな（放）し玉ふ事なかれ。我等をけうあく（凶悪）よりのがしたまへ。あめん。

なお、途中にある「てんたさん」というのは当時のポルトガル語の宗教用語で「悪魔からの」誘惑」という意味です。いくつかの部分は現代のものとは異なりますが、四百年以上前に訳されたものとは思えないほど、現代の「主の祈り」と似ていることがおわかりかと思えます。「主の祈り」はマタイ・ルカの本文としても収載されていますから、これがすなわち当時のラテン語聖書のことばの日本語訳でもあったのです。

針を打ち出し、原典への忠実性と、日本語の読者にとつて、聖書の神をいかなる存在として受け取らせるかという点でのバランスをとったのです。

やがて聖書の改訳が進むにつれて、文体はしだいに平明になります。「天にいますわれらの父よ」（口語訳）から「天におられる私たちの父よ」（聖書協会共同訳）へと、表現は現代の標準的な語彙になっていきます。また、「です」「ます」の丁寧語も使われるようになります。しかし、そこでもなお、神に向かうことばとしての一定の格調が保たれています。

## おわりに

「主の祈り」の日本語訳の歴史を見ると、日本語聖書翻訳は、時代ごとの文体変化に応じて姿を変えてきたことがわかります。しかし同時に、その根底には、神に向かうことばを、教会における書物としてどう整えるかという、一貫した課題がありました。

敬語は、日本語において人と人との関係を表すだけのものではなく、その言葉が発せられる場面とも深く関与します。聖書翻訳においては、人が神に向かう姿勢を表すためのことばでもありましたし、また同時に聖書がどのような場で読まれてきたかの記録でもあります。日本語の聖書翻訳史とは、日本語が信仰の文体をどのように作り出してきたかを示す歴史とも言えるのです。